

タイトル:平成 28(2016)年度 教育セミナー(第 12 回)

日時:2016 年 9 月 18 日(日)~21 日(水)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

「ファーティマ朝マグリブ期(909-972)の宮廷構造に関する一考察

— 「宮殿の人々(ahl al-qaṣr)」の検討を中心に

福光 叶恵(早稲田大学大学院文学研究科)

私がこのセミナーの存在を知ったのは、現在とは違う大学に所属していた、学部生時代のことでした。そのときから、自分が大学院に進学した暁には、絶対にこのセミナーに参加して発表しようと心に決めていました。今年度実際に応募して、7 月下旬頃、自分の名前と発表題目の載ったプログラムを頂いたときには、夢が一つ叶ったようで本当に嬉しかったです。

しかし、全てが順風満帆に進んだわけではありませんでした。夏季休業中の研究は思うようにはいかず、セミナー初日の 9 月 18 日が近づいてくるにつれ、遅々として進まない発表の準備に焦りばかりが募っていきました。ついには「もうこんな状態で発表なんて出来ない！ いっそ世界に終末が訪れるまで山奥に引き籠もりたい！」と、本気で考えてみたりもしました。

ところが、いざセミナーが始まってみると、「逃げ出したい」という気持ちはいつの間にか消えていました。これまで「歴史学」という枠組みの中で「中東・イスラーム」を見てきた自分にとって、「中東・イスラーム」を主軸として、他の学問分野を専門とされる先生や受講生の方々の報告を聞いたことは、知見を広めるという意味でも、自分の専攻する「歴史学」という分野について客観的に見直せるという意味でも、大変有意義で何より興味深いことでした。他にも、報告以外の懇親会や昼食の時間等には、知り合いが全くいないということもあり、初めは一人で右往左往していることも多々ありましたが、先生方にも受講生の方々にも気さくに話しかけて下さる方が多く、むしろ私の場合馴れ合える相手がない環境だからこそ、比較的沢山の方々とお話が出来る良い機会が持てたと思います。また、3 日間、他の受講生や講師の方々の報告、さらにそれらを叩き台として展開される議論を目の当たりにしたことで、自分の研究からはどのような議論が生まれるのか、そしてそこから、今後の自分の研究の指針としてどのような地平が開けるのかを見てみたい、という欲求に駆られ、もはや当初の消極的な姿勢が嘘のように、楽しんで 4 日目の自分の発表に臨むことが出来ました。

発表では、ありがたいことに多くの質疑を頂き、歴史学を専攻する方々から頂いた専門的なご指摘だけでなく、他分野の方々から頂いた新鮮なご意見も、普段の大学院生活の慣れ親しんだゼミの時間には決して得られない、貴重なものでした。また、同日がセミナー最終日だったこともあり、終了後の懇親会の際にも、先生や受講生の方々から様々なアドバイスを頂くことが出来、夏季休業中に迷走始めていた自分の研究に、まるで一縷の光が射したように感じられました。発表自体は、頂いた時間を目一杯使い切ることが出来ず、質疑に対する応答も支離滅裂で、拙いものであったことは重々自覚していますが、それでもやはり「やって良かった」と思っています。また、今後も出来るだけ多くの場所で自分の研究を発表していきたい、と新たな決意が芽生えるきっかけにもなりました。

最後に、このような機会を設けて下さった、先生方、事務局の千葉様、並びに関係者の皆様、本当にありがとうございました。